

生存科学研究ニュース

Vol. 31, No.2 2016.7 発行
発行 公益財団法人 生存科学研究所

〒104-0061 東京都中央区銀座 4-5-1
tel: 03-3563-3518 fax: 03-3567-3608 email: office@seizon.or.jp
<http://seizon.umin.jp>

専門職における批判的判断 研究会

2016年3月13日(日)12:00~14:30「専門職における批判的判断」研究会が京都大学近辺のレストランにて開催された。テーマは「美的想像力の育成—教育、医学、ケアの倫理」である。参加者は、研究会のメンバーである、小島静二氏(小島歯科クリニック院長)、ポール・スタンディッシュ氏(UCL教育研究所教授)、齋藤直子(京都大学 准教授)で、パリ第一大学教授でアメリカ哲学、女性哲学とケアの倫理を専門とするサンドラ・ロジェ(パリ第一大学教授)をゲストとしてお招きした。これに先立つ関連テーマとして3月12日(土)には、京都大学融合チーム研究プログラム—SPIRITSプロジェクト「翻訳としての哲学と<他>文化理解」(齋藤直子・研究代表者)主催の国際会議“The Cultivation of Aesthetic Imagination”が京都大学で開催され、ピアニストを招聘してのピアノ・リサイタルを行い、理論と実践、学術研究と実践家の対話的ディスカッションが行われた。本研究会参加者はこの国際会議に参加して問題意識を共有した上で、研究テーマである「専門職における批判的判断」に特化して、今、なぜ、どのような状況で美的想像力の育成が専門職に求められるのか、それと教育・医学・ケアの倫理はいかに学際的な英知を結集できるのかが話し合われた。齋藤が議論の参加とともに通訳を同時進行した。

第一に、医療、教育を中心に、専門職を育成する上での美的想像力、美的独創性の育成における師弟関係や教育のあり方について話し合われた。ある個人が自らの声、その人らしさ、色づかいを発揮できるようになる師との関係とはどのようなものであるのか。それは、師の偉大さを継承すること(時にはその偉大さの呪縛)と同時に、学ぶ者自身が専門職としてオリジナリティを発揮するという葛藤を背負う教育の課題である。具体例として上述国際会議におけるピアニストの例がアーティストの抱える苦難と課題として取り上げられた。

第二に、ケアの倫理に関わり「死の教育」をめぐる現代社会の動向とそこに専門職の美的想像力はいかに関わるべきかについて話し合われた。国際的な対話の場として、グローバル化の世界における全

般的な動向および、イギリスと日本のケースが例として挙げられた。スタンディッシュ氏よりは、グローバル化の波の中ですべてが効率化、行為遂行化、数値化され、目的達成の「肯定(正)」的動向が教育を支配する中、イギリスでは死の教育も「生命保険」(life insurance)志向になっていることが指摘され、死の教育に「否定(負)の経験」を取り入れることの重要性が提起された。

第三に、終末医療とケアの倫理の関係、およびそこにおける美的想像力の位置づけについて話し合われた。医療従事者として終末医療に関わり、死に瀕する患者に接する小島氏より、何をケアしてよいかすらわからないぎりぎりの状況で専門職に求められる関わり方について実践的-哲学的問いが投げかけられた。ケアの倫理を専門とするロジェ氏よりは、あくまで個々人の個別性に耳を傾けることを重んじるケアの倫理の重要性が提起された。スタンディッシュ氏よりは、イギリスで制覇する臨床行動主義的セラピーへの対案として、ケアの倫理に根ざす他者の受容の重要性が提起された。

第四に、ケアの倫理と、思考様式における女性性、男性性という問題について話し合われた。小島氏よりは、ジェンダーとメンタリティとして、<男性-男性>、<男性-女性>、<女性-男性>、<女性-女性>という四つの範疇が提案された。これに対しては、ロジェ氏より、そうした範疇化でジェンダーを区分することへの疑問が提起された。(スタンディッシュ氏は著書『自己を超えて:ウィトゲンシュタイン、ハイデガー、レヴィナスと言語の限界』(法政大学出版局2012年)ジェンダーベースではない形で、思考様式における女性的-受容的言語・と男性的-合理的言語の問題を論じている。)

最後にスタンディッシュ氏より、専門職の批判的判断を育成するにあたって、功利主義と義務論の倫理の範疇に収まりきらない個別の生という観点の重要性が提起された。個別の生の重みを感じするには「美的想像力」が不可欠とされる。本研究プロジェクトの総括として、今回の研究会は、分野、国、言語、ジェンダーの異なる多様な声境界を超えて交差し、とりわけ、医療-教育-哲学の学際的知の交流の重要性を想起させるものであった。

(齋藤直子)

健康の社会的決定要因としての ソーシャル・キャピタル研究会

本研究会の目的は、健康の社会的決定要因としてのソーシャル・キャピタルの究明と医療費との関連です。健康の社会的決定要因の重要性については、厚生労働省が打ち出している健康日本 21（第二次）の中で指摘されており、なかでもソーシャル・キャピタルは健康の社会的決定要因の構成要素の一つとして平成 26 年厚生労働白書で言及されています。筆者はソーシャル・キャピタル（社会関係資本）を「心の外部性を伴う信頼・規範・ネットワーク」と定義し、ネットワークは人々の社会的なつながりを指し、信頼や規範はそのネットワークの中で育まれます。

今日、健康に与えるソーシャル・キャピタルの影響を分析した実証研究には多くの蓄積がありますが、医療費への影響を分析したものは限られています。いずれにせよ、ソーシャル・キャピタルと健康との関連には因果関係が不明な点も多く、ソーシャル・キャピタルのどの構成要素がどのような機序を経て、人々の健康と医療費にどのような影響を及ぼすのか、より詳しい検証が求められています。ソーシャル・キャピタルは高齢者就業率と正の関係があり、さらに高齢者就業率が高い地域では一人当たり老人医療費が低い傾向があることがわかっており、65 歳以上の高齢者層では地域における団体参加率が高い者ほど心の健康状態が良い傾向がみられます。つまりソーシャル・キャピタルは、高齢者の社会参加を通じて老人医療費減と一定の関係があると考えられます。

2016 年 5 月 14 日（土）第 1 回健康の社会的決定要因としてのソーシャル・キャピタル研究会を開催した。谷原真一先生（帝京大学大学院）をお招きし、「一人当たり老人医療費を規定する要因とレセプト分析」の観点からご報告いただきました。まず、日本の保険医療制度の概説と、国民医療費には介護保険の費用が含まれていないという現状や、都道府県間格差には入院の寄与度が高く、入院の地域差には受診率の寄与度が高いことなどについてご報告いただきました。従来の医療費分析の限界について、地域的単位の設定の問題や、因果推論（原因と結果に関する時間の前後関係）の問題、レセプトデータの特性や限界が考慮されていない点などを指摘されました。レセプトに記載される情報は医療保険制度の影響を強く受けており、調査研究に用いるには制度への深い理解が必須であることと、「保険病名」に関する考察をご報告いただきました。分析事例紹介では、災害医療支援のためレセプト情報が活用されたこと、成人麻疹定点サーベイランスの評価、院内感染対策サーベイランスの評価などを挙げられました。さらに今後のレセプト分析の課題としては、現在別々に集計されている医療と介護の連結と、地

域包括ケアシステムの構築にあたり、保険者である市町村や都道府県が、地域の自主性や主体性に基づいてその地域の特性に応じて作り上げていくことが必要であると指摘されました。

医療費の地域格差を検討する場合、人口規模の小さな被保険者における偶然誤差に留意し、時間の前後関係を検討し、原因と結果を取り違えないようにすることが重要であるとのこと報告をいただきました。30 名ほどの参加者を得、質疑応答ではフロアから老人医療費の地域差に関する質問が出され、興味深い議論が交わされる研究会となりました。

本研究会に助成をいただいている生存科学研究所に篤く御礼申し上げます。

（稲葉 陽二）



「対人支援職者の倫理的行動と倫理観の構造」 研究会

2016 年 5 月 2 日（月）14:00～16:00 に Skype 上で第 1 回研究会を開催した。今回の研究会の目的は、研究課題と構想をさらに明確化し、研究活動計画を具体化することにあった。参加者の議論の概要を以下に示す。

現代の日本社会では、医療福祉の専門職者の支援を受ける者は、医師、看護師のみならず、必要に応じて、多岐にわたる専門職者のサービスを受ける。各専門職者は、対象者の自己決定権の尊重を基本に、それぞれの職業倫理に基づき各職種に最もふさわしいとされる行為（ケア）を対象者に提供するが、事前の各専門職種間の価値観の摺合せは必須ではない。サービスの受託者は、細分化されたサービスごとに様々な価値観を提示され、自己決定権の名の下に選択を一任された結果、解決すべき問題の複雑さに混迷することになる。対人支援職者の倫理的行動と倫理観の構造を総合的に検証し、結果的にこれらサービスの受託者の困惑の低減につながる知見を得ることが、本研究課題の最終的な目標と言える。その端緒として、様々な対人支援職者の職業上の倫理観を明確化、比較検討し、各職業を超えた共通の倫理観と、各職業に特有の倫理観の抽出の可能性を

検討したい。そのための客観的かつ実証的なデータ収集には量的調査が有効であると思われるが、表層的な職業倫理の知識の問いだけでは「望ましい」とされる行為のみが抽出され、倫理的ジレンマや職業倫理の根幹にある個々の人間観、倫理観に言及することが困難となる。各専門職者の倫理観と実際の行為の乖離を含む、倫理的価値観の構造を俯瞰し考究するに足る客観的データを獲得するためには、まずは質問紙の内容を十分に検討する必要がある。

そこで、今年度を、来年度以降の質問紙調査に用いる質問紙の内容を検討するための予備調査期間と位置づけ、予備調査として対人支援専門職者を対象に半構造化インタビューを実施する。各研究分担者が3人の専門職者に対して職業倫理に関わる体験を聴取、その語りから逐語録を作成し、職種特有の価値観と職種を超えた共通の価値観の概念化の可能性についてKJ法を用いて検討する。得られた結果から、来年度の本調査に用いる質問紙の内容を吟味し、調査用紙を作成する。

今回は、各自の研究室または自宅からのパソコンを用いたSkype上でのやりとりであったが、音質、画像ともに問題はなく、活発な討議を通じて、上述の今年度の活動構想をほぼ確定することができた。次回の研究会は、Skypeを用いて7月29日(金)に予定している。

(吉田浩子)

第2回健康価値創造研究会

第2回健康価値創造研究会を2015年7月27日18:00~21:00に順天堂大学医学部会議室にて開催した。この研究会の活動目標は“健康とは何か”に意味深い回答をあたえ、健康の持つ現代的な価値を明らかにしてそれを社会に敷衍する一方、その価値を創造していく実践体系を社会に提示していくことにある。森本兼曩研究代表(一財・産業医学研究財団常務理事)の総合司会のもとに以下の話題提供講演とそれに続く討議を行った。

蝦名玲子代表(グローバルヘルスコミュニケーションズ)はSALUTOGENESIS(健康生成論)に立脚した健康理論とそれを基盤とする自身の健康創造実践活動について語った。まず、過酷な環境に置かれても健康を維持できる人がいるのはなぜ?と問いかける。1990年代欧州における過激な内戦状態のなかで数多の困難に屈することなくたくましく生きていく人がいること、また国内でも厳しいストレスに満ちた職場環境でも生き生きと働き成長を遂げていく人がいること等をつぶさに観察調査することから蝦名はそこに健康の持つ深い意味を見届けて、ヘルスコミュニケーション



ンの重要性に気付く。

健康とは“幸せで精力的な生活を送ることが出来る状態”(Patch Adams, 1998)との定義から出発して“客観的に現状を把握したうえで自身の(健康)資源(=環境の持つ不健康要因に対して変容是正していく力量)にきずいて、明るい展望(希望)を抱き、この世はそして自身は生きていく価値があると感じられる状態”(Ebina)とする。

ではどのようにしてこの健康状態を把握するのか。Sense of Coherence (SOC) (A. Antonovsky 日本版・山崎喜比古訳)を使用する。わかる感=認知、できる感=行動、やるぞ感=動機づけの3つの感覚尺度から構成され、幼少期から今に至るすべての環境刺激により形成されてくると考えられる。SOCはいまや全世界30数ヶ国にて測定されており、SOCの高い人は低い人に比較して現在の心の健康状態がよく、また、人生で幾多の困難に遭遇しても将来とも良好な状態を維持できることが明らかになっている。

近年注目されるマインドフルネスやレジリエンスとも深く関わっていることが明らかにされており、このようなSOCを手段とする蝦名の具体的なヘルスコミュニケーション活動について種々の議論を行い現代社会に即した健康価値創造活動のGOOD PRACTICEの一つと実感した。



第2席講演は大槻剛巳(川崎医科大学教授)により“マイナス荷電粒子優位な室内環境の生体影響”と題して行われた。人体の健康を維持するために重要な働きをしているNatural Killer Cell Activity (NK活性)などの免疫

活性を賦活する自然環境の一つとしてマイナス荷電粒子の働きに注目して建築住環境でこれを人工的に生成することによる健康創造(増進)効果を実験的に証明した一連の仕事が紹介された。このようなマイナス荷電粒子は自然界でも野山の森林環境、滝つぼ周辺などで常に生成されている。

健康増進室内環境を構築する見地から、多孔木炭塗料を塗布した壁面に電圧(直流マイナス72V)を配して、壁面を負に帯電し、室内環境中の20nm前後のプラス荷電粒子を壁面に吸着収集し、相対的にマイナス帯電粒子優位な室内住環境を建築マイナス荷電粒子とプラス荷電粒子の差は500-700個/cc)して、以下の効果を実証して報告した。

①2.5時間の短期滞在試験:60名ずつの被験者で2.5時間の滞在を行った。マイナス荷電粒子優位な室内居住者の方が対照室内居住者に比して軽微ながら有意にIL-2が高まっていた。

②2週間夜間滞在型試験:次に、2週間夜間滞在型実験を実施した。マイナス荷電粒子優位な部屋での居住者の方が、NK活性が有意に増強された。前記短

期試験の結果にみられた IL-2 の増加が2週間で蓄積的にNK細胞を活性化したと考えられた。

③in vitro 試験管内実験系による検討：細胞培養用孵卵器にマイナス負帯電粒子を多く含む空気を流入させる実験系で、各種免疫担当細胞の変化を観察した（粒子数の差は3,000個/cc前後。マイナス荷電粒子優位な空気を流した孵卵器（細胞培養器）では対照孵卵器に比し、NK細胞活性の増強、静置状態におけるCD4陽性T細胞の活性化、アロ抗原に対する反応性T細胞の活性化の増強の傾向、制御性T細胞機能の軽度の増加などが観察され、マイナス荷電粒子の直接的な免疫賦活作用の存在が示唆された。

④この装置を住宅に設置しての長期滞在試験：実際の住居に建築設置した居住被験者で、3ヶ月単位のON/OFFの変更を行い、NK細胞活性は有意にONで増強されOFFで減少した。

このマイナス荷電粒子発生装置は某有名建築会社の住宅建築にすでに採用されているが、上に述べたように健康創造（増進）住居環境として、NK活性の増強をもたらすことにより、癌の予防やウイルス感染などの症状の軽減化につながる効果可能性が示唆された。なお、この実験的研究の詳細は最近刊“生存科学”誌に掲載されている。

これら2席の講演の加えて青木清（上智大学名誉教授・公財生存科学研究所理事長がWHOの健康の定義におけるSPIRITUALITYについて解題的な講演を行い第4の健康定義に加えることの意義を討議した。さらに稲葉裕（救世軍清瀬病院医師）による討議のまとめでは健康であることが人としてこの世に生きていく際にことさらに論ずるほどに重要なことなのかなとの本質的な懐疑の念が述べられた。（森本兼曩）

事務局便り

*第4回市民公開講座

「ユマニチュードという革命」開催のお知らせ

日時：8月7日（日）13：00～16：20

会場：上智大学10号館講堂

基調講演：ロゼット・マレスコッティ

イヴ・ジネスト、

（所属：ジネスト・マレスコッティ研究所）

シンポジウム「ケアの科学的分析・評価と実践」

・静岡大学情報学部 石川翔吾

・デジタルセンセーション株式会社 坂根裕

・医療法人社団東山会 調布東山病院看護部

・総合討論

司会 静岡大学情報学部 竹林洋一

イヴ・ジネスト

*第4回生存科学シンポジウムの開催のお知らせ

日時：12月10日（土）13：00～

会場：鉄門記念講堂

テーマ：生の豊かさと貧しさ—21世紀の生存を考える

講師：島菌 進 東京大学名誉教授・

上智大学神学部特任教授

上野千鶴子 東京大学名誉教授・

立命館大学特別招聘教授

武藤 真祐 祐ホームクリニック石巻理事長

安梅 勅江 筑波大学大学院教授

寄贈図書



著者 稲葉陽二
題名 ソーシャル・キャピタル
入門
孤立から絆へ
出版社 中央公論新社
定価 760円+税

研究会日報

- 3月13日（日） 専門職における批判的判断研究会
- 3月18日（金） 平成27年度第2回理事会
- 3月26日（土） 高齢者、障害者等の生存に関わるユニバーサル・ヘルス・ケアと福祉・社会保障の研究会
- 3月30日（水） 高齢者、障害者等の生存に関わるユニバーサル・ヘルス・ケアと福祉・社会保障の研究会
- 5月2日（月） 対人支援職者の倫理的行動と倫理観の構造研究会
- 5月14日（土） 健康の社会的決定要因としてのソーシャルキャピタル研究会
- 5月16日（月） 健康価値創造研究会
- 5月23日（月） 平成28年度第1回理事会
- 5月30日（月） 子ども期の貧困や逆境体験と認知症及び要介護リスクに関するライフコース研究会
- 6月10日（金） 評議委員会
- 6月10日（金） 資本主義の教養学研究会
- 6月16日（木） 医療政策研究会（II）
- 6月25日（土） 健康価値創造研究会
- 6月27日（月） 編集小委員会
- 8月6日（土） ライフイノベーションの展開に伴う倫理的・法的・社会的検討研究会
- 8月7日（日） 第4回市民公開講座 ユマニチュードという革命 シンポジウム